

浦上キリシタンの復活

～迫害と被爆、度重なる地獄から立ち上がった人々～

◆日時：2019年 **2月16日** (土) **13:30** 開演～15:30 終演

◆会場：浦上キリシタン資料館 コミュニティースペース



被爆後、信徒らは浦上天主堂の瓦礫の中からアンジェラスの鐘を拾い上げ復興を祈り高らかに鳴らした。(一番上にいるのが森内秀雄氏)

禁教から250年経った1865年、潜伏していた浦上キリシタンは外国人居留地に建った大浦天主堂で、待ち侘びていた神父を見つけました。彼らにとっては「**神父発見**」でした。しかし明治政府による最後のキリシタン迫害「**浦上四番崩れ**」を経なければ彼らに信仰の自由は訪れなかったのです。

1873年、ようやく禁教の高札が下ろされ、流配から帰ってきた人々は自分たちの家である天主堂を30年かけて造りあげます。しかしその20年後の1945年、一発の原子爆弾により瓦礫と化してしまうのです。

世界にも類をみない**キリシタン迫害**という精神的な地獄と**原子爆弾**という物理的な地獄を二度も経験した浦上の人々は、如何に立ち上がったのでしょうか？

「信徒発見」で信仰を告白したテルの子孫である森内浩二郎氏を迎え、父・秀雄氏が撮影し信徒らと制作した「浦上四番崩れ」を題材にした劇映画「**信仰の礎**」の上映とともに語っていただきます。

◆お話：森内 浩二郎(もりうち・こうじろう)



1952年長崎市生まれ。1865年に大浦天主堂を訪れ、プチジャン神父に「ワレラノムネ アナタノムネ トオナジ」「サンタマリアノゴゾウハドコ？」とその信仰を告白し「信徒発見」として世界を驚かせたコリとテル姉妹。森内氏はそのテルの玄孫に当たる。テルはその後「浦上四番崩れ」で津和野に流配され、厳しい拷問を受けるもその信仰を守り抜いた。テルの手首には死ぬまで手鎖の痕が消えなかったという。

森内氏の父・秀雄は1945年、大橋の実家付近で被爆して死んでいこうとする純女学徒隊の二人に洗礼を授けた。荒野になった浦上の復興に尽力し、「浦上四番崩れ」を描いた「**信仰の礎**」の撮影や編集を担当するなど8ミリカメラで人々の信仰生活を記録した。そんな先祖の篤い信仰を受け継ぐ敬虔なクリスチャンである。



◆定員：50名 ◆参加料：500円

◆申込：浦上キリシタン資料館宛に電話・ファックス・メールでお申し込みください。

◆主催： アジェンダNOVAながさき (公財) 県民ボランティア振興基金支援事業

浦上キリシタン資料館

開館時間：10:00-17:00 休館日：月曜日(但し月曜が祭日の時はその翌日)

〒852-8116 長崎市平和町11-19

Tel&Fax 095-807-5646 E-mail: urakamicm@mxm.cncm.ne.jp

■長崎電鉄「平和公園」停留所徒歩5分 ■県営バス「浦上天主堂前」徒歩1分